

# 小学校の通常学級における発達障害児への支援 — 特別支援教育コーディネーターによる担任教師への支援の視点から —

渡辺 雅子\*・姉崎 弘\*\*

## The support to developmental handicapped children in the normal classes of the elementary schools — From viewpoint of the support to normal class teacher by the special support education coordinator —

Masako WATANABE and Hiroshi ANEZAKI

### 要 旨

特別支援教育に制度が転換し、学校は支援の必要な児童に対し支援に翻弄される毎日である。本研究では発達障害児への支援を担任教師への支援の視点から考察する。研究にあたり、担任教師や特別支援教育コーディネーターへのアンケート形式、インタビュー形式で調査を行った。その結果、担任教師だけでなく、担任教師を支援するはずの特別支援教育コーディネーターも自身の力量不足に悩んでおり、知識と実態把握が結びつかないという現状が見られた。児童の実態把握を的確に行うには、まず定型発達の子どもの発達のしくみや順序を知り、発達の視点に立って支援を必要とする児童の困っている要因や発達課題を探り、適切な支援を行うことが重要と考える。特別支援教育コーディネーターは専門性を高めるためにも、発達を大切にしたい保育を行う保育士や幼稚園教諭からその実践を学ぶことが大切であると考えられる。

### I. 問題と目的

2007年に特別支援教育に制度が転換し、小学校の通常学級の発達障害児に対して、一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導や支援を行うことが定められた。

学校現場では人的配置が十分でない中、特別支援教育コーディネーターを中心に模索しながら支援の必要な子どもたちのニーズに応じた指導や支援を考え、取り組み始めている。しかし、今、高い専門性をもって実践できる教師の人数は少ないと言える。担任教師は、適切な指導や支援の方法に戸惑い、試行錯誤しているように見受けられる。

特別支援教育コーディネーターはそんな担任教師を支援する役割がある。専門的な知識や指導技術を助言するだけでなく、カウンセリングマインドを生かした支援をする等、高い資質が求められている。しかし、特別支援教育コーディネーターの多くは担任教師を支

援するほどの力量がなく、困っているように見受けられる。児童の実態把握を的確に行いたい、自分の力量に自信がもてないようである。

特別支援教育コーディネーターを含め、教師は支援を必要とする児童への支援に戸惑っている。その理由の一つは、児童の実態把握において、教師が児童の発達を見過ごしやすいため、的確に実態把握が行えていないのではないかと考える。

小学校現場において、担任教師は発達の遅れが疑われる児童を目の前にして、「少し幼いだけ。そのうちできるようになる」との捉えで、一斉指導をしてしまうことがある。また、手先が不器用なら、手指をよく動かす微細運動を課題にするだけで、微細運動の発達の前段階である粗大運動を課題にはしないようである。他の児童より配慮はしても、「少し幼い」とはどの面がどのくらい幼いのか、未発達なのか、その要因までは分析せず、的確に実態把握ができず、適切な支援を

\* 桑名市立大山田南小学校

\*\* 三重大学大学院教育学研究科

行うまでには至らないように見受けられる。

小学校の教師は困っている現象を軽減する方法は考えても、発達の視点に立って児童を見立てると、発達課題を設定することができることに気づいていないようである。このような視点に立って保育を行っているのは、幼稚園や保育所である。小学校での、発達障害のある児童への有効な支援方法の一つとして、発達の視点に立って発達課題を設定し、指導、支援することではないかと考える。

乳幼児期での発達障害の早期発見、発達の視点に立った早期支援により、発達障害のある子どもは発達していくという事例<sup>1) 2) 3)</sup>がある。保育士や幼稚園教諭は巡回相談を受け、発達の視点からの子どもの実態把握や支援方法を実践しているが、その視点があるからこそ一般的な子どもの自然な発達に近づけられると考える。

特別支援教育コーディネーターが、児童の心身の発達や認知等を考慮した実態把握の仕方を担任教師に助言できれば、どの教師も児童の見方、捉え方が変わり、「一人ひとりの教育的ニーズに応じた」よりよい支援につながっていくのではないかと考える。そのためにも特別支援教育コーディネーターは子どもの心身の発達についての研修も深めることが大切となってくると考える。

本研究において、特別支援教育コーディネーターによる担任支援のあり方を、発達の視点に立った児童への指導、支援から探りたい。また、特別支援教育コーディネーターの資質を高めるための研修の内容についても考察したい。

## II. 方法

### 1. 調査 1

(1) 調査時期 200X年11月25日

(2) 調査対象

A市立B小学校教員、担任教師をはじめ専科等を含む15名に調査を依頼した。

(3) 調査内容

A市立B小学校通常学級等における特別支援教育の現状と課題について、アンケート形式による実態調査を行った。具体的には「児童への支援」、「個別の教育支援計画および個別の指導計画の作成」、「教師の専門性向上のための研修」、「保護者との連携」、「教職員との連携」に関して、学校現場での現状と課題に関する調査である。

### 2. 調査 2

(1) 調査時期

200X年11月17日～11月30日

(2) 調査対象

A市内にある小学校28校の特別支援教育コーディネーター33名に依頼した。

(3) 調査内容

特別支援教育コーディネーターとして、特別支援教育を推進するにあたり、取り組みや、工夫、努力、課題等について、アンケート形式による調査を行った。

### 3. 調査 3

(1) 調査時期 200X年11月11日

(2) 調査対象

A市教育委員会教育研究所指導主事へインタビュー形式による聞き取り調査を行った。

(3) 調査内容

A市特別支援教育コーディネーター研修のねらいや内容、今後のA市の特別支援教育のあり方について、聞き取り調査を行った。

## III. 結果

### 1. 調査 1

「B小学校における支援を必要とする児童への支援、指導に関するアンケート」調査の結果

(1) 支援の必要な児童について

調査結果より「クラスに支援の必要な児童数」の総数は43人で、全体の約14%にあたる。この数字は教師が主観的に捉えたものであるが、実に文部科学省の示す約6.3%の2倍以上の値であった。支援を必要とする児童が多く存在することがわかる。

(2) 児童への学習や学校生活の支援について

特別支援教育をふまえた指導や支援に関して、「学級経営や授業作りでの対応」、「個別指導での対応」、「生活場面での対応」、「パニック時の対応」、「TT等の複数指導等について」、どの項目も適切な方法を知りたいとの回答が約9割であった。

(3) 個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成について

個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成に関することにおいても、作成の仕方や具体的な支援のあり方等に関して、知りたいとの回答は約9割であった。作成にあたり、約9割の教師が「困った時には専門性の高い教師の支援を望んでいる」こともわかった。

(4) 教師の専門性向上のための研修について

児童の実態把握において、その仕方や児童の困っていることやその原因等を知りたいとの回答は約9割であった。また、研修会において児童の特性や支援、指導方法を知りたいとの回答も約9割であった。研修会においては、校内だけでなく、校外の研修会への希望もあった。

さらに、児童の特性や支援、指導方法等を巡回相談等の専門機関に相談したいとの回答が約9割あった。

(5) 保護者との連携について

保護者からの相談に対し、適切な助言ができているのかどうか悩むことが多いとの回答は、約8割にのぼった。また、保護者との連携において困った時は校内に相談できる教師の存在があるとよいとの回答が約8割あった。

(6) 教職員との連携について

教師間での児童の情報の共有は重要であり、同じ視点や考え方で児童への指導や支援を行うことが大切であると全員が回答した。また、児童への指導や支援方法において助言できる教師が校内にいるとよいとの回答は約9割あった。

## 2. 調査2

「特別支援教育コーディネーターの校内での取り組みについて」のアンケート結果

(1) 特別支援教育コーディネーターとしての校内での取り組みについて

アンケート調査の結果、校内委員会の開催、校内研修会の企画と開催、個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成と把握、専門機関との連携等、形式的な取り組みの内容では8割以上の小学校で取り組んでいた。しかし、児童や保護者、担任教師への具体的な支援、児童の観察等特別支援教育コーディネーターの専門的な知識や指導技術が求められる取り組みは5~6割の回答となった。形式的な取り組みは整っているが、内実は伴わないという現状が見られた。

児童の観察時の観点を問う項目では、学習中の様子は行動や教師や友だちとの関わり、身体の動き等を見る割合が約7割あった。発達面における認知や社会性、運動機能等を見る割合は4割前後に落ち込んだ。手指機能を見る割合は3割に満たず、外観となる学習の様子は見ても、その様子から一步踏み込んで要因を探るために発達面を見るという割合は低いという現状が見られた。

児童への支援に関して、特別支援教育コーディネーターの専門性を問う項目では、「児童の的確な実態把

握ができること」と「的確な支援や指導ができること」との回答が約8割あった。

(2) 自由記述「特別支援教育コーディネーターとして取り組む上での悩み」について

様々な悩みが記述されていたが、時間の確保の難しさと、特別支援教育コーディネーターとしての力量不足を痛感する内容のものが多く、「担任教師への支援が適切なのかどうか自信がない」「知識と実態把握が結びつかない」とのことであった。

(3) 自由記述「特別支援教育を推進する上で、考えること、思うこと」について

校内の教師の特別支援教育に対する意識や考え方に温度差があり、特別支援教育を学校全体で取り組んでいくための校内研修会の充実を挙げる回答が多数見られた。

## 3. 調査3

「A市の特別支援教育コーディネーター研修のあり方に関して、インタビュー形式による聞き取り調査」の結果

A市特別支援教育コーディネーター研修では、特別支援教育コーディネーター1年目を初級研修、2年目以上を中級研修と分け、両者それぞれのニーズに応じた研修会を行っているとのことであった。両者の研修のねらいは、保護者や教師からの相談を受けることができる人材の育成をすることである。

A市は巡回相談や教育相談、総合相談等、発達や子育てに関する相談を行っている。最近では相談が激増し、希望通りの日程では相談ができない現状がある。市内で相談を受けることのできる教師、発達検査を実施できる教師の確保が重要とのことであった。そのため、特別支援教育コーディネーターはできる限り校内で支援を考え、工夫し、それでも相談の必要な場合に専門機関を利用することが望ましいとのことであった。

## IV. 考 察

### 1. 調査の結果から

(1) 調査1より

B小学校の支援を必要とする児童の割合は約14%で、教師は緊張感をもって支援に望まないといけないう状況にある。しかし、支援を必要とする児童への適切な指導方法を求めていることから、教師は特別支援教育における知識や指導技術等に自信がもてず、戸惑っていることが推察される。

個別の教育支援計画や個別の指導計画に関する調査

においても、具体的な指導や支援について知りたいという回答が多かった。実際場面での指導や支援、計画を立てる段階での指導や支援において、その方法や具体的な内容を求めているということは、その裏に児童の実態把握が的確にできないということが隠れているのではないか。児童の困っている現象面だけを捉え、その現象への対応をどうすればよいのかと教師も困っているように見受けられる。現象面の一步踏み込んだところにある要因、例えば発達段階を見るところまでにはなされていないようである。指導や支援方法を工夫してもうまくいかないのは、そこに原因の一つがあると考えられる。

そのため、教師が専門機関からの助言を必要とする回答が多いのではないか。しかし、巡回相談等専門機関での相談には時間調整が必要となる。明日の学級経営や学習のために、「たった今」相談したいのに、できないのである。校内に専門的な知識や指導技術を助言してくれる教師を求めていることが推察される。相談できる教師がいることで、より早く適切な支援ができることは言うまでもない。特別支援教育コーディネーターが専門的な知識や指導技術を高め、担任教師の支援ができることが求められていることがわかる。

## (2) 調査2より

アンケート調査の結果により、特別支援教育における校内体制は、どの小学校でも取り組まれていた。中でも、校内委員会や関係機関との連携等組織的で形式的な取り組みを行っているが、実際の支援等特別支援教育コーディネーターの力量が問われるような取り組みは比較的少なく、特別支援教育コーディネーターが自分の力量不足により取り組むことが難しいのではないかと考えられる。

自由記述にあったように、知識はあっても実態把握と結びつかないとの声は、特別支援教育コーディネーターの力量不足に悩んでいるように見受けられる。児童の支援は的確な実態把握から始まることを痛感しながらも、実態把握は外観を見て、さらにその要因を探るにも、児童の何を見て、どう分析すると的確な把握となるのかを模索しているのではないかと推察する。今まで小学校の教師は子どもの発達に関して重要視はしてこなかった。子どもの発達を見ること、そこから発達課題を設定できることに気づいている特別支援教育コーディネーターが少ないようである。

## (3) 調査3より

インタビュー調査から、A市特別支援教育コーディネーター研修のねらいにおいて、「保護者や教師からの相談を受けることができる人材の育成をする」との

ことで、そのためにも特別支援教育コーディネーターは専門的な知識と指導技術を高め、児童や保護者、担任教師への支援を行えるように資質を高めることが求められていることがわかる。特に求められる力として「特別支援教育をふまえた学級経営や授業作りがわかること」、「的確な児童の実態把握ができること」、「児童への適切な支援ができること」等を重視していることがわかる。

特別支援教育コーディネーターが児童や保護者、担任教師への支援を行う時に重要なのは、児童の実態把握であり、把握するには先述したような発達の視点に立ち、現状と次の課題がわかることである。次の課題がわかると、児童はもちろん、保護者や担任教師からの相談にも的確なアドバイスをすることができる。

## 2. 発達の視点の重要性

### (1) 発達の視点をもつ

3つの調査からわかることは、特別支援教育コーディネーターを含め教師は支援を必要とする児童の実態把握を行うにあたり、発達の視点をもつことが必要であることである。人は障害のあるなしにかかわらず、同じ順序で発達する。定型発達の子どもの発達の順序やしぐみがわかった上で、それを基準に観察すると、児童のつまづきや困難な部分の要因が見えてくる。

小学校の教師は教職に就くために、誰もが心理学を学んでいる。子どもの発達のしぐみや順序について一度は理解しているはずであるが、発達段階と児童の実態とを照らし合わせて、見据えることはほとんどしていないと推察する。幼児教育ではその時期において、幼稚園教諭や保育士は子どもの発達を捉えて保育するため、発達に関してとても大切にしている要素である。ここに小学校教育と保育の違いがあると考えられる。

小学校では就学までに一定水準の発達段階に達しているという前提のもと、一斉指導において教科学習を中心に教育を行う。担任教師には学習指導要領に定められた教育課程を1年間で進め、指導していかねばならない義務もある。教科学習の内容や進め方にとらわれ、児童の発達に関して重要視しない実態がある。そのため、発達の遅れに気づけず、「幼い」「徐々に成長する」と安易に考えてしまう。「幼い」だけでなく、どのぐらいの発達段階であるのか、少し前の段階であれば、他の児童と同じぐらいの段階になるにはどんな発達課題がよいのか等、考えるとよいと思われるが、ほとんど行われていないようである。

小学校通常学級において、見られる発達の視点のない指導、支援の一例を挙げる。

例えば、筆圧が低い等、手指の不器用な児童がいたとする。その児童が少しでも指先が動くように、字を

書く練習やぬりえ、手指をよく使う微細運動を課す作業等を課題にすることは、よくあるケースである。しかし、手指機能の未発達から不器用なのであれば、そこまでの発達段階に至っていないから不器用であるのに、動きにくい指先を必死になって動かして細かな作業をしても効果はあまりないのである。細かな作業を課された児童は、自己肯定感を低下させてしまう可能性すらある。微細運動ができないということは、その前の発達段階に戻り、肩や肘、手首等を大きく円滑に動かす粗大運動を十分に行うことが必要なのである。つい、目先のできないことに目が行き、その部分だけを改善しようと字の繰り返し練習や細かな作業を課題にしてしまいがちである。微細運動をするのではなく、全身を動かす運動や重い物を持つこと、ぶら下がる、支持する動作のある遊び等粗大運動を課題にする方が未発達の手指には効果的なのである。身体の発達の順序は身体を中心から外に向かって発達していく。粗大運動ができると、細かな手指の動かし方がわかり微細運動ができるようになる<sup>4)</sup>。このような身体の発達のしくみや順序がわかっていれば、発達段階を考慮し、個別の教育的ニーズに応じた教材を準備することで、児童はのびのびと学習に向かうことができるであろう。

赤木（2009）は、「ものを壊す問題行動等の『問題行動』を表面的に『止めるべきもの』『なくすべきもの』として見るのではなく、『どのような発達のな特徴のもとに、物を壊す行動が見られるのか』と、自閉症児者の『壊さざるを得ない、そうせざるを得ない』理由をたどりながら理解する<sup>5)</sup>と述べ、発達の理解のもと、発達段階に応じた指導を行うことで、障害のある子どもの発達全体を豊かにし、「問題行動」をなくした実践を行い、発達の理解に焦点をあてることの大切さ<sup>6)</sup>を説いている。障害特性があっても、その特性が発達段階と絡み合って現れるということである。

菅野（2008）は「支援に際し、人は必ず、発達の前に前段階にある行動を獲得していなければならないことは心にとどめておくべき重要な考え<sup>6)</sup>と述べ、発達を考慮した支援や指導の重要性を説いている。

筆者は以前、通常学級在籍の肢体不自由のある子どもの身体能力を高めるため、取り出し授業においてサーキットトレーニングの実践を行ったことがある。運動の内容を考えるにあたり、発達段階に合わせた内容を選んだ結果、徐々に身体を支持する力や調整力がつき、身体機能が高まるだけでなく、意欲も高まったという経験がある。この経験から、発達段階に合った発達課題が今の力を高めることを実感した。

この発達の視点があって初めて、障害特性の対応のHow to 本が役に立つと考える。ただ単に、「この障害特性には、この対応」という訳にはいかないことが

納得できる。やはり、特別支援教育コーディネーターは、子どものさまざまな側面の発達を理解し、その視点をもって児童の支援に臨むべきである。児童を多面的、総合的に捉えることで、児童の困っている現象の要因が見えてくるのである。丁寧な実態把握は、この発達の視点で観察することから始まるのである。

## (2) 特別支援教育コーディネーターの資質

校内のキーパーソンである特別支援教育コーディネーターの役割は、校内委員会の開催運営、個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成、関係機関との連携、児童や保護者、担任教師への支援等、多岐にわたっている。それぞれの役割に深い知識や行動力、柔軟性、人間性等の高い資質が求められている。学校内のすべての教職員と信頼関係をもって仲よくし、話せるという資質が必要と考える。

大沼（2007）は、特別支援教育コーディネーターの資質を「人間としての魅力、豊かな人間性、子ども理解、保護者との信頼関係、特別支援教育に関する基礎知識をしっかりと持っており、指導力、学級経営力の高い人<sup>7)</sup>と具体的に述べている。これらの資質は、さまざまな役割を果たしていくために必要な資質である。

しかし、ここでは、特別支援教育コーディネーターの役割である「担任教師への支援」にしばって、その資質を考える。悩む担任教師は少しでも早く適切な支援方法を求めている。そんな担任教師の支援に必要なことはたくさんあり、心理的、実務的な支援が大切となる。例えば、相談を受ける際には傾聴することやカウンセリングマインドを生かした支援は必要不可欠であるが、ここでは、心理的な支援に関するのではなく、児童の実態把握から適切な支援をすることに焦点を当てて考えていく。

特別支援教育コーディネーターは的確な児童の実態把握と適切な支援ができ、助言できることが重要であると考えられる。

瀧本（2007）は「丁寧な実態把握が適切な支援につながる<sup>8)</sup>とし、丁寧な実態把握としての観点を、「発達段階からの視点はとても大切だと感じています。ニーズのある子どもたちへの教材や授業の組み立てを考えると、子どもたちに提示する教育内容がその子どもの発達段階に合っているかいないかの検証は必ずしなければなりません。」<sup>9)</sup>と述べている。

3つの調査の結果からも、児童の実態把握を行うにあたり、発達の視点をもつ必要のあることが見えてきた。特別支援教育コーディネーターの資質として、児童の実態把握や特別支援教育の深い知識が求められている。その具体的なものとして、的確な実態把握に必

要な発達の視点を持ち、担任教師に児童の発達段階の現状と、児童に合った発達課題を助言できることが求められていると考える。

さらに、特別支援教育コーディネーターによる担任教師への支援が充実すれば、担任教師の力量も高まると考える。特別支援教育コーディネーターは自身が身につけた発達に関する知識や指導技術、つまり、子どもの発達のしくみや順序がわかり、観察において児童の発達段階が正確に捉えられることを担任教師にも還元できるとよいのではないかと考える。担任教師の力量も高まれば、支援を必要とする児童へのよりよい支援も充実するのではないかと期待する。

### (3) 研修の内容

特別支援教育コーディネーターが担任教師に、児童の発達段階の現状とニーズに応じた発達課題を設定し、支援方法を助言することが役割であることがわかった。しかし、調査2の結果から、特別支援教育コーディネーター自身も力量不足に悩んでいることが分かった。今まで、小学校の教師は発達に関することを重要視してこなかったため、特別支援教育が始まって支援に右往左往しているのが現実である。

まずは発達に関する内容で研修を深めることから始めなければならない。特別支援教育に関わる研修は障害の特性理解をはじめ、支援方法、アセスメント、校内体制等幅広い。校内、校外のどこに行っても特別支援教育における研修会は開かれているが、発達に関する研修内容は他の研修内容と比較すると少ないように見受けられる。子どもの発達に関する内容の研修会を行い、発達段階と照らし合わせて、発達課題を見出し、一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援ができるようになることは大切である。特別支援教育コーディネーターには、発達に関する理論や発達の視点で児童を観察し、発達課題を見出すという事例等から学ぶ研修が必要であり重要である。

研修のもち方の一つの例として、幼稚園教諭、保育士等から保育実践を学ぶのも意義深いことと考える。筆者は幼稚園で実際に、幼稚園教諭が他の園児らとそれぞれに交わりながらも、一人ひとりに適切な指導を行っているところを見学したことがある。教諭と話す中で、児童を発達段階から的確に把握し、一人ひとりのニーズに応じて保育していることを知った。その経験から、幼稚園教諭や保育士と子どもの話をすること、保育について話をすること、小学校での子どもの様子について話をすること、教育の話をすることは、互いにとても大切なことと実感した。

日々の保育実践で発達段階を指標に保育内容を考えているのが幼稚園教諭や保育士である。特に幼児期は

個の発達段階が誕生月に大きく左右される。また、環境や経験の違いでも差が出てくる。幼稚園教諭や保育士は担任する幼児それぞれの発達段階を的確に把握して課題を考える必要がある。そのためには、その年齢に合った発達課題を基準にもち、担任する幼児の発達段階と照らし合わせて、課題を考えなければならないのである。今の発達段階を踏まえて、次の発達段階を見据え、成長発達を促す手立てを保育の中で実践する。これはまさしく、特別支援教育に大切な実践である。小学校での教育現場では、あまり気づかなかったことである。幼稚園や保育所では当たり前の保育実践を小学校の教師が学べる機会があるなら、より意義深い。

さらに、幼小にこのような場が年に何回かあると、自然な形で保、幼、小の連携が築けるのではないだろうか。特別支援教育に大切なことの一つに保幼小中の連携が挙げられている。子どもの様子や教育、保育に関する情報交換はとても大切なことと考える。

斎藤(2007)は「一人一人のニーズに応じる視点は、同時に人間成長における発達の視点に支えられていることが必要である。教育は、個体としての、また社会的文化的存在としての人間発達の最も活発な段階を担当している」<sup>10)</sup>と述べ、教師への訓戒とも言える教育の大切さを示している。また、白石(2004)は「障害児も、健常児と同じ発達の道筋を歩みます。その道をゆっくりと歩いているのです。同じ発達の段階で、同じように発達の願いと悩みを持っている存在として障害児を見たい」<sup>11)</sup>と発達の権利と保障を述べている。

障害のあるなしにかかわらず、人は発達し成長していくのである。どんな子どもも発達する権利があり、より自分らしく生きていけるように、特別支援教育コーディネーターをはじめ、教師はその発達を大切にしながら、一人ひとりのニーズに応じた支援を行っていくことが教育であり、務めであると考えられる。

## V. 今後の課題

### (1) 研修会の実践と検討

本研究では、実際に発達の視点に基づいた内容での研修や担任教師への助言等を行っていないため、発達の視点に立ち、対比し、支援することは効果があるのかどうかを実証していない。実際に研修会を行い、成果と課題を受け、よりよい研修会のあり方を検討する必要がある。

### (2) 研修内容の充実

校内研修会の内容として、発達の視点に立ち、発達段階に見合った発達課題を見出すことは、実態把握の一側面であり、これだけでは適切な支援はできない。

発達の視点に立つ実態把握だけでなく、学級経営や授業改善等における研修内容も検討し、様々な側面から児童の実態把握を行い、児童への適切な支援のあり方を追究する必要がある。

#### 【参考文献】

- 1) 北野絵美・吉岡恒生（2009）：広汎性発達障害を早期に疑われる幼児への発達支援 第1報 — 療育機関等から保育園・幼稚園等への移行を通して見えてくる「意義」と「課題」について —. 愛知教育大学治療教育学研究, 29, 47-55.
- 2) 神野歩・嶋田ながこ・田村浩子・田辺正友（2007）：地域における乳幼児期から学童期までの継続した教育・発達支援 — 発達相談員としての取り組みをとおして —. 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 16, 41-48.
- 3) 田村浩子・田辺正友（2009）：高機能自閉症者の発達と教育・発達支援 — K君との出会いから大学卒業・就職までの20年間 —. 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 18, 1-7.
- 4) 手の使い方指導研究会（編）（2003）：障害児のための新・手の使い方の指導. かもがわ出版, 87.
- 5) 赤木和重（2009）：第I部 発達の段階と発達診断 第4章 自閉症の発達の理解と発達診断 — 発達的に1歳半頃に焦点を当てて —. 白石正久・白石恵理子（編）教育と保育のための発達診断. 全障研出版部, 83-97.
- 6) 菅野敦（2008）：第I部 第4章. 菅野敦他, 障害児者の理解と教育・支援. 金子書房, 32.
- 7) 大沼直樹（2007）：第1部特別支援教育コーディネーターの基本的姿勢. 大沼直樹・瀧本一夫, 特別支援教育コーディネーター基本的姿勢と実際. 明治図書, 37-39.
- 8) 瀧本一夫（2007）：第2部特別支援教育コーディネーターの実際 — 教育相談を通して —. 大沼直樹・瀧本一夫, 特別支援教育コーディネーター基本的姿勢と実際. 明治図書, 48.
- 9) 同掲書8). 73.
- 10) 斎藤佐和（2007）：第1章障害児教育の基本的視点. 筑波大学特別支援教育研究センター 斎藤佐和（編）特別支援教育の基礎理論. 教育出版, 1.
- 11) 白石正久（2004）：発達の扉〈下〉. かもがわ出版, 19.